

3代続いた学員の衆議院議長



中村敬次郎

1931（昭和6）年から36年までの5年間、3人の人物が帝国議会の衆議院議長を務めた。中村啓次郎（第29代）、秋田清（第30代）、浜田国松（第31代）である。彼らはいずれも東京法学院に学び、そのうち中村が1890（明治23）年、浜田が翌91年に卒業している。秋田は、日本法律学校（現日本大学）を経て1903年に本学の推薦学員となった。

台湾で弁護士業を行うなどした中村は、08年郷里和歌山から代議士となり、当選6回、政友会の領袖として知られた。秋田は徳島県の出身で判事から弁護士に転身し、二六新報社長なども務め12年高知県から出馬し、犬養毅のもと国民党や政友会で手腕をふるった。弁護士であった浜田も03年郷里の三重県から政界入りし、当選すること12回、37年間の長きにわたって議員生活を送った。政友会の最高幹部として広く名を知られていた浜田は、「大臣たるより議長」の念願を達しての議長就任であった。

中村が議長となったその年、柳条湖事件をきっかけに満州事変が始まり、浜田は議長を辞めた翌37年に寺内寿一陸軍大臣との間で「腹切り問答」を繰り広げた。彼らが衆議院議長を務めた時代は軍国主義と政治との相克の始まりであった。